

現行の改良目標に対する委員からの御意見と今後の方向性について

—馬—

(●：委員意見に対する方向性、○：事務局提案)

項目	これまでの委員からの御意見等	今後の方向性（素案）
全般	<p>① 改良増殖目標の達成に向け、期間途中での検証が必要ではないか。</p> <p>②-1 重種馬生産の動機が希薄になってきている。馬肉生産が動機ではないので、生産を継続するのであれば、単なる保存ではなく利活用を進めるべきである。</p> <p>②-2 繁殖雌馬に対する地方競馬全国協会からの補助金の増額が、頭数増につながったと考えるが、補助金に依存しない生産基盤の確保のためには将来につながる抜本的な対策が必要である。</p> <p>②-3 生産が過剰になると重種馬の価格が安くなり、生産者は一挙に減少すると考えられる。</p> <p>③-1 馬を診療できる獣医や、飼養管理ができる者の減少により、技術の伝承がなされないことが、受胎率や生産率が上がらない要因となっている。</p> <p>③-2 十勝では、馬の診療体制の確立に向けて学生及び若い獣医師の養成等の取組を行っているが、他地域を賄うためには、より多くの技術者の養成が必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 改良増殖目標は10年後の目標を設定しており、おおむね5年ごとに実施される畜種別研究会において目標期間途中における達成状況の確認・検証を実施。 ● 担い手の確保や効率的な飼養管理に努め、優良な繁殖雌馬を確保し、生産基盤を強化するとともに、生産意欲の向上につながるように馬に対する利活用を広げる旨を記述。 ● 技術者及び担い手の減少が飼養頭数の著しい減少を招いていることを踏まえ、技術者及び担い手の確保が、喫緊の課題であることを記述。

	<p>③-3 馬の臨床教育に重点をおいている獣医師の国際的な教育認証制度を進めることは、国内で馬を診療できる獣医師を確保する観点から重要である。</p> <p>③-4 生産・育成・調教のための人材の確保、獣医師や装蹄師を含めた技術者の確保が必要である。</p> <p>③-5 生産者の飼養戸数減少や飼養者の平均年齢の上昇がみられ、若手後継者が不足しているため、対策が必要である。</p> <p>③-6 馬に携わる人口が減少しており、産業として成り立たなくなりつつあることが問題。</p> <p>④-1 地方競馬場が縮小した中、生産農家が不用意に頭数を増やしても、レースに出場できる馬の頭数が決まっており、価格低下を招くため、生産頭数が伸びることは必ずしも良いことだけではない。</p> <p>④-2 地方競馬の売り上げを伸ばすことにより、生産を刺激する環境を作っていく必要がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 引退競走用馬の更なる利活用を進めるような仕組みについて記述。
--	--	--

改良目標

○ 能力に関する改良目標

項目	これまでの委員からの御意見等	今後の方向性（素案）
重種馬	<p>① 2歳馬は能力検定を受検する年齢であることから、2歳で繁殖への供用を開始することを目標とすることは適当ではないのではないか。</p>	<p>（補足説明資料参照）</p> <p>○ <u>家畜として早熟性を進めるのは経営に有効であると考えられるが、2歳馬の多くがばんえい競馬の能力検定に向け飼</u></p>

		<p><u>養され、妊娠させることが困難である現状を鑑みれば、早熟性に着眼した選抜を実施するのは困難であるため、数値目標から除外することを検討。</u></p> <p>○ <u>受胎率、生産率の目標数値について検討。</u></p>
軽種馬、乗用馬	意見なし	○ <u>軽種馬、乗用馬についての記述は、前回と同様でよいか確認。</u>

○ 体型に関する改良目標

項目	これまでの委員からの御意見等	今後の方向性（素案）
体型	<p>① 馬に抵抗感のある人や幼児に対しては、愛玩用の扱いやすい極小格馬（ミニチュア・ホース等）に触れ、馬と親しむ機会を設けることにより、恐怖心を取り除くことが大切。（極小格馬は、セラピー対象者にコンパニオンホースとして大いに活用されている。）</p> <p>② 小中学生・初心者等に対し、乗用馬に親しみ、世話をし、かつ乗馬を楽しめる環境作りが大切である。このため、扱いやすく、乗りやすいライディングポニー（体高130～140cm程度）の生産拡大を、効率良くはかっていくことが大切。</p>	○ <u>用途に応じた体型とすることについては、前回と同様の記述でよいか確認。</u>

○ 能力向上に資する取組

項目	これまでの委員からの御意見等	今後の方向性（素案）
改良手法 （重種馬）	<p>① ブルトン種・ペルシュロン種については、輸出元であるフランスでも生産基盤が縮小しており、国内の純粋種の維持確保が困難。ベルジアン種の導入なども含め重種のあり方について検討が必要。</p> <p>② 馬の多様な利活用のため、授精卵移植などの新たな生殖補助技術の活用及び普及が必要。</p> <p>③ 馬肉の価格が良いため、繁殖馬として活用されず、血統登録せずに販売され改良増殖に結び付かないことが問題。</p> <p>④ 馬の用途別に能力等を評価する仕組の構築が必要ではないか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 国内の重種馬のうち、日本輓系種が占める割合は大きく、そのあり方について検討していく方向性を盛り込む。 ● 純粋種については、フランスからの凍結精液の活用も検討しながら、日本輓系種の改良素材や、近交回避の観点から、引き続き推進。 ● 新たな生産方法として可能性を秘めた輸入凍結精液の活用や受精卵移植等の技術については、積極的な活用に向け改善と普及に努めるものとする。 ● 家畜登録事業は、不良形質の淘汰や優良家畜の選抜等家畜改良増殖に果たす役割が大きいことから、登録団体は血統登録頭数を確保する取組を推進。 ● 多様な利活用を推進しつつ、求められている馬の能力等の評価に向けた取組を推進することについては、前回同様に「(3) 能力向上に資する取組」の各項目に記述。
（軽種馬）	① 説明参考資料中の、「用途区分」には「競走用」も明記されたい。	<p>（補足説明資料参照）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「競走用」を用途区分の中に明記。

(乗用馬)	<p>②-1 国内産馬の能力が向上し、世界トップクラスの馬に比肩するも、血統の偏重化が見られる。</p> <p>②-2 血統の偏重化に配慮する必要がある。</p> <p>③ 馬の販売が好調なため、当歳で登録の申請をするケースが増えている。</p> <p>④ 馬の用途別に能力等を評価する仕組の構築が必要ではないか。(再掲)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 多様化に配慮した育種素材の確保に努めるとともに、血統情報等を活用した交配を推進。 ● 多様な利活用を推進しつつ、求められている馬の能力等の評価に向けた取組を推進することについては、前回同様に「(3)能力向上に資する取組」の各項目に記述。
	<p>①-1 平成 29 年のフランス産の凍結精液輸入解禁を受け、馬を輸入することなく、国内で生産する乗用馬の資質が向上できるようになると良い。</p> <p>①-2 障害者向け乗用馬等の生産においては、利用可能な馬を効率的に増やすため、新しい生産方法(人工授精や受精卵移植)や用途に向けた生産が必要である。</p> <p>①-3 初期の段階では海外の温順で扱い易い乗用馬を生体で輸入し、国内で人工授精や受精卵移植の技術を活用しながら、日本の風土や利用目的に適合した乗用馬の改良・増殖を目指していくことが肝要だと思われる。</p> <p>①-4 馬の多様な利活用のため、用途に応じた馬を効率的に生産する上で、新たな生殖補助技術の活用及び普及が必要。</p> <p>②-1 日本在来馬については、馬種により利用や保存に対する方向</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 新たな生産方法として可能性を秘めた輸入凍結精液の活用や受精卵移植等の技術については、積極的な活用に向け改善と普及に努めるものとする。 ● 日本在来馬については、馬種により性格

	<p>性が異なるため、地域の実情を踏まえた対応が必要である。</p> <p>②-2 日本在来馬の利活用事業により、在来馬を乗用馬として調教する講習会を開催するなど利活用を促進している。</p> <p>②-3 日本在来馬は近交係数の上昇による種の絶滅が懸念される。</p> <p>③ 馬の用途別に能力等を評価する仕組の構築が必要ではないか。(再掲)</p>	<p>や体型などの特性は異なるものの、その多くの用途は乗用馬として利用されているため、その特性をいかした利活用を推進するとともに、希少性に配慮した品種の保存を推進。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 多様な利活用を推進しつつ、求められている馬の能力等の評価に向けた取組を推進することについては、前回同様に「(3) 能力向上に資する取組」の各項目に記述。
飼養管理	<p>① サラブレッドの乗用への再調教を含め、日本人に適した安心・安全に乗れる多様な乗用馬の確保が必要である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 乗用馬については、競馬を引退したサラブレッドの乗用馬としての再トレーニングを含む馴致及び育成技術等の向上等に取り組む。 ○ <u>担い手の育成や馬に関する技術者及び指導者等の確保及び技術向上に努める。</u>
衛生管理	<p>① 馬鼻肺炎による流産は、不活化ワクチンから生ワクチンへ移行したことにより減少したと考えられる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 伝染性疾病のまん延を防止等をするため、適切な予防接種を推進。
多様な利活用に関する情報共有	<p>①-1 改良増殖目標の先にある馬の生産・利活用の振興目的を見据えて、その達成のために何をしなければならないかを議論していくべき。</p> <p>①-2 用途に応じた飼養頭数の把握ができる調査が必要である。</p> <p>①-3 ポニーを含め乗用馬が実際に飼われている実態をつかむの</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 用途に応じた利活用を推進するため、関係者が集まり意見交換をするとともに、用途別飼養実態の把握に向けた取組を推進。

	<p>が難しい。</p> <p>②-1 乗馬クラブでは、高齢者の健康増進や少子化への対応を進めている。</p> <p>②-2 乗用馬等の馬資源の増産に向け、引退競走用馬の活用が重要。</p> <p>②-3 年少者・初心者が扱いやすい乗用馬の供給拡大が重要。</p> <p>②-4 クロスブレッドが良い方向に進むこともある。例えば、日本はサラブレッドの世界的な産地であり、その基盤を活用し、純血だけにこだわらず、サラブレッドを活用したクロスブレッドを生産することで乗用馬の他、色々な活用ができる馬が生産できると考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 馬の多様な利活用を推進するため、関係者間での意見交換等の取組を推進し、需要に即した生産・供給を進める。
--	--	---

増殖目標

項目	これまでの委員からの御意見等	今後の方向性（素案）
	意見なし	○ <u>飼養頭数については、利用目的ごとの需給動向に応じた頭数となるよう努める。</u>